

ニュースにおける発話速度の日ト対照研究
— 2020 年の計測結果をもとに —

福盛 貴弘

A contrastive study on the speech rate of the news in
Japanese and Turkish :

Based on the measurement results in 2020

FUKUMORI Takahiro

abstract

The purpose of this study is to identify characteristics of the speech rate and pause by Japanese speaking news reporters. Control analysis of similarities and differences in comparison with news reporting in the Turkish language during the same year is also included. News programs in Japanese and Turkish languages during July and August 2020 are the targets of analysis.

Results are the following.

- (1) The speech rate in the Japanese language became slower in 2020 in comparison with 2006.
- (2) Pause in the news in the Japanese language increased in 2020 in comparison with 2006.
- (3) The information volume per minute does not change in the news in the Japanese and Turkish languages. However, the speech rate is faster in the news in the Japanese language due to high frequency and proportion of pauses.

キーワード：発話速度、ポーズ、ニュース、日本語、トルコ語

1 序

2006 年に日本語のニュースの発話速度の分析を行なった（福盛 2008）際に、必ずしも経年変化で早口になっているわけではなく、1990 年代と比べてむしろ遅くなっていることが確認できた。その後、技術革新によって高齢者や難聴者に対する配慮としての話速変換が NHK 放送技術研究所や工学系の研究室で取り上げられるようになった。こういった技術によってニュースが誰にとっても聞き取りやすくなることは言うまで

もない。一方で、アナウンサーの発話速度そのものに変化があるかについての興味を湧いたので、14年の年月を経て再度アナウンサーの発話速度を計測するに至った。

また、日本語以外のニュースと対照分析するにあたって、モーラでは同等の基準で比べられないことも感じていた。日本人の直感に合う分析結果はモーラによるものではあり、音節は一般的には浸透していない（福盛 2020）。しかし、音節は全ての言語にあるものだが、モーラは全ての言語にあるものではない。この点をふまえて、モーラでの結果を出しつつ、音節による結果も出さなければならないという境地に至った。

本研究の目的は、日本語のニュースにおける発話速度やポーズの特徴を析出することである。また、同じ年のトルコ語のニュースと比べて、どのような類似点や相違点があるかを対照分析することも目的とする。

2 日本語のニュースの発話速度

2.1. 方法

2.1.1. 分析資料

2020年7～8月に放送された地上波キー局のニュースを5つ以上で抽出した、総計35件のニュースを対象とした。放送局は、NHK（日本放送協会）、日本テレビ（日本テレビ放送網株式会社；日テレ）、TBS（株式会社TBSテレビ）、テレビ朝日（株式会社テレビ朝日；テレ朝）、テレビ東京（株式会社テレビ東京、テレ東）、フジテレビ（株式会社フジテレビジョン）の6局である。なお、ニュースを読み上げた発話者については、局アナであるか、フリーアナであるか、その他の職業であるかは問うていない。

対象としたニュース一覧は、表1の通りである

表1：分析対象とした日本のニュース番組と発話者一覧

放送局	番組名	発話者	年月日
NHK1	NHK ニュース7	瀧川剛史	2020/7/10
NHK2	NHK ニュース7	瀧川剛史	2020/7/29
NHK3	ニュースウォッチ9	和久田麻由子	2020/7/20
NHK4	列島ニュース	守屋瞭	2020/7/30
NHK5	列島ニュース	荒木さくら	2020/7/30
NHK6	NHK ニュースおはよう日本	新井秀和	2020/8/8
日テレ1	日テレ NEWS24	杉野真美	2020/7/18
日テレ2	日テレ NEWS24	矢島学	2020/7/20
日テレ3	news every	藤井貴彦	2020/7/4
日テレ4	NNN ストレイトニュース	森富美	2020/7/29
日テレ5	NNN ストレイトニュース	藤田大介	2020/7/29

TBS1	N スタ	よしいよしこ	2020/7/18
TBS2	N スタ	山内あゆ	2020/7/22
TBS3	N スタ	井上貴博	2020/7/23
TBS4	JNN フラッシュニュース	水野真裕美	2020/7/30
TBS5	JNN フラッシュニュース	伊東楓	2020/8/4
テレ朝1	サタデーステーション	高島彩	2020/7/11
テレ朝2	サタデーステーション	高島彩	2020/7/18
テレ朝3	報道ステーション	徳永有美	2020/7/14
テレ朝4	報道ステーション	下村彩里	2020/7/14
テレ朝5	ANN ニュース	本間智恵	2020/7/4
テレ朝6	ANN ニュース	島本真衣	2020/7/10
テレ東1	昼サテ	末武里佳子	2020/7/17
テレ東2	昼サテ	狩野恵里	2020/7/20
テレ東3	ゆうがたサテライト	塩田真弓	2020/7/14
テレ東4	ゆうがたサテライト	塩田真弓	2020/7/20
テレ東5	ワールドビジネスサテライト	大江麻理子	2020/7/31
フジ1	Live News イット!	木村拓也	2020/7/21
フジ2	Live News イット!	加藤綾子	2020/7/22
フジ3	Live News イット!	加藤綾子	2020/7/29
フジ4	Live News イット!	加藤綾子	2020/7/30
フジ5	Live News イット!	佐々木洋子	2020/7/29
フジ6	FNN Live News α	今湊敬樹	2020/7/29
フジ7	FNN Live News α	三田友梨佳	2020/8/3
フジ8	FNN Live News days	島田彩夏	2020/8/3

2.1.2. 分析方法

抽出されたニュースを文字化して、モーラ数を数えた。「え」「えー」などのフィラーや息を吸った際の「すー」「すっ」などは、モーラ数には含めていない¹⁾。発話速度については、最上（1999：42）、福盛（2008）を参照して、モーラを基本単位として、1分あたりで何モーラ発しているかという分速（モーラ毎分）と、1秒あたりで何モーラ発しているかという秒速（モーラ毎秒）を算出した。

また、福盛（2008：195）で示した以下の条件も踏襲した。

- ・発話者が途中で交代する場合、交代したものは対象としない。
- ・映像に合わせて声だけが流れるニュースで、発話者が特定できない場合、データから除外する。

1) ニュースの文字起こしについては、2020年度開講の「言語学特殊講義1」の受講生によるデータを一部利用している。また、追加データとして、池田彩子氏、濱岡佑帆氏の協力を得た。この場を借りて感謝の意を申し上げる。

2.2. 結果

秒速、分速の結果を表2に示す。平均秒速は6.36 モーラ毎秒 (± 0.93)、平均分速は381.64 モーラ毎分 (± 55.64) であった。

表2：日本語でのニュースにおける発話速度（モーラ基準による算出結果）

放送局	発話者	秒	モーラ	秒速	分速
NHK1	瀧川剛史	66	340	5.15	309.09
NHK2	瀧川剛史	61	424	6.95	417.05
NHK3	和久田麻由子	40	221	5.53	331.50
NHK4	守屋瞭	66	416	6.30	378.18
NHK5	荒木さくら	61	399	6.54	392.46
NHK6	新井秀和	65	453	6.97	418.15
日テレ1	杉野真美	33	219	6.64	398.18
日テレ2	矢島学	29	177	6.10	366.21
日テレ3	藤井貴彦	62	482	7.77	466.45
日テレ4	森富美	69	430	6.23	373.91
日テレ5	藤田大介	60	387	6.45	387.00
TBS1	よしいよしこ	46	318	6.91	414.78
TBS2	山内あゆ	29	203	7.00	420.00
TBS3	井上貴博	19	142	7.47	448.42
TBS4	水野真裕美	61	426	6.98	419.02
TBS5	伊東楓	60	447	7.45	447.00
テレ朝1	高島彩	63	296	4.70	281.90
テレ朝2	高島彩	18	93	5.17	310.00
テレ朝3	徳永有美	25	155	6.20	372.00
テレ朝4	下村彩里	67	428	6.39	383.28
テレ朝5	本間智恵	48	302	6.29	377.50
テレ朝6	島本真衣	44	262	5.95	357.27
テレ東1	末武里佳子	54	380	7.04	422.22
テレ東2	狩野恵里	29	223	7.69	461.38
テレ東3	塩田真弓	26	191	7.35	440.77
テレ東4	塩田真弓	54	396	7.33	440.00
テレ東5	大江麻理子	40	241	6.03	361.50
フジ1	木村拓也	36	249	6.92	415.00
フジ2	加藤綾子	31	218	7.03	421.94
フジ3	加藤綾子	50	309	6.18	370.80

フジ4	加藤綾子	50	205	4.10	246.00
フジ5	佐々木洋子	50	288	5.76	345.60
フジ6	今湊敬樹	51	303	5.94	356.47
フジ7	三田友梨佳	50	201	4.02	241.20
フジ8	島田彩夏	57	347	6.09	365.26

2.3. 考察

2.3.1. 2020年の発話速度は2006年と比べて変化したのか

福盛（2008）で示された2006年のニュースに基づいた報告では、453 モーラ毎分が平均値であった。それに対して、今回の結果では382 モーラ毎分となっており、発話速度が遅くなっていることが明らかになった。そして、2006年の発話速度を超えている例は2件のみである。この変化の要因として、高齢者への配慮というのを推測している。例えば、今井（2005）で示されたような高齢者用話速変換技術によって、アナウンサーは自分のペースで読んでいるが、その速度では聞きとりにくい高齢者に向けて技術的に話速を遅くしている。その後、技術開発が進む一方で、放送用語の規範として発話速度そのものを調整することが検討され、2006年時点よりは遅く読むことが推奨されたのではないかと考えている。

一例として、高島彩氏を取りあげると、2006年では435 モーラ毎分であったが、2020年では平均296 モーラ毎分となっている。それに対し、報道番組ではないところ、例えば『ワールド極限ミステリー』（TBS、2021/2/3）では、469 モーラ毎分で話していた。高島彩氏は、日常的な会話の発話速度に比べると、ニュース原稿を読む際には遅くしていることが明らかである。また、放送用語としても、2006年と比べて、かなりゆっくり話していることが確認できる。この点については、高島彩氏の卓越した技術と配慮の表れではないかと推察している。

なお、福盛（2008：206-207）で、各年代ごとの発話速度がまとめられている。1960～70年代は約400 モーラ毎分、1980～90年代は約500 モーラ毎分であったが、2006年は453 モーラ毎分といったように経年的に早口にはならないという結果が示され、2020年にいたっては382 モーラ毎分といったように1960～70年代の発話速度に戻ったことが確認できた。

2.3.2. 情報量という観点

ニュースにおいては、発話者それぞれに適する発話速度で話しているため、ある程度の個人差はあるが、極端に早いという発話者はいないことは分かる。ただし、短い時間で詰め込んだ情報を提供しなければならない時は、同一個人においてもばらつきが大きくなることもある。

ここでは、複数のニュースが対象となった発話者の例について検討する。表3で、4名分の個人内での平均発話速度と標準偏差を示しておく。

表3：複数のニュースを対象とした発話者の平均発話速度

発話者	秒速		分速	
	M	SD	M	SD
瀧川剛史	6.05	0.27	363.07	76.34
高島彩	4.93	0.33	295.95	19.87
塩田真弓	7.34	0.01	440.38	0.54
加藤綾子	5.77	1.51	346.25	90.50

塩田真弓氏については、26秒と54秒という時間の違いがあったが、ほぼ同じ発話速度で発していたことが確認できる。これは常に安定した発話速度で発せられるという点で能力が高いということの意味するが、他の発話者の能力が低いわけではない。同じ時間を与えられても、原稿に記された情報量によって、視聴者に聞きやすい発話速度を調整しつつ、時間内に収めるという能力があるからである。

ニュースの時間そのものが発話速度に影響を与えるかということ、必ずしもそうではない。加藤綾子の例では、31秒と50秒では、31秒の方が分速モーラ数は多くなっていた。これはいつもそうであるとは限らないが、そう言った場合もあるということである。また、瀧川剛史氏や加藤綾子氏は、約1分のニュースに対して、原稿の情報量によって発話速度を調整しているため、ばらつきが生じたのだと言える。

これらの点から、情報量によって発話速度を調整することもアナウンス技術の一つと言える。そして、ニュースにおいて、2006年よりは1分あたりの情報量が減っているという言い方もできるのである。

2.3.3. ポーズの割合と回数

福盛(2008)では、1分あたりで約20%のポーズがあることが示されている。ニュース中のポーズについて、今回の結果から計測した6名分の結果を表4に示す。

表4：日本のニュースにおけるポーズ

発話者	秒	ポーズの回数	ポーズ時間長(s)	ポーズの割合
杉野真美	33	10	5.56	16.8%
矢島学	29	10	7.03	24.2%
山内あゆ	29	12	5.49	18.9%
よしいよしこ	46	23	9.28	20.2%
本間智恵	48	23	12.77	26.6%
島本真衣	44	20	11.88	27.0%

6名分のデータをふまえて、1分あたりのポーズの回数、時間長を回帰直線で予測したところ、回数は $0.6971x - 10.27$ から31.6回、時間長は $0.3207x - 3.5731$ から15.67秒となった。したがって、予測される割合は26.1%となり、2006年よりポーズが置かれる時間が長くなっていることが確認できた。これは、発話速後が遅くなっていることとも関連している。先述した高齢者への配慮から、より分かりやすく聞きとってもらうために、ポーズが長くなったと考えられる。ポーズは、聞き手にとっては聞いている情報を整理するための時間となるので、ある程度の長さが聴解にとって重要な要因となるからである。

2.3.4. 単純な物理量としての補正值

ニュースは、映像やポーズを含めて時間内に一定の情報量を伝えるものである。したがって、先に挙げた発話速度は、そのニュースで伝えたい情報量を表しているともいえる。では、単純な物理量としての発話速度を見るために、ポーズを抜いた場合に、どの程度の発話速度になるかを算出してみたところ、8.32 モーラ毎秒（ ± 1.23 ）、499.17 モーラ毎分（ ± 73.86 ）という結果になった。

3 トルコ語のニュースの発話速度

3.1. 方法

3.1.1. 分析資料

日本語と対照するために、ほぼ同時期となる2020年7月29日および31日に、Web上で閲覧できた動画ニュース3件、『Sabah』（2020/7/29）、『Haber』（2020/7/31）、『Haberler』（2020/7/31）を対象とした。

3.1.2. 分析方法

トルコ語の音節構造は、基本的な構造として(C) V, (C) VC, (C) VCCがあり、外来語における例外としてCCV, CCVCなどがある（福盛2017）。したがって、母音の数を数えれば、音節数は数えられる。この点をふまえて、3件のニュースに対して音響的に母音を特定したうえで、開始から30秒分の音節数を数えた。その他は、モーラ数でない点以外については、日本語と同様の方法をとっている。

3.2. 結果

3.2.1. 発話速度

秒速、分速の結果を表5に示す。平均秒速は5.12音節毎秒（ ± 0.58 ）、平均分速は307.18音節毎分（ ± 35.05 ）であった。

表 5：トルコ語でのニュースにおける発話速度（音節基準による算出結果）

番組	発話者	秒	音節	秒速	分速
Sabah	男性	30	159	5.30	318.00
Haber	女性	28.6	160	5.59	335.55
Haberler	男性	30	134	4.47	268.50

3.2.2. ポーズ

ポーズの回数、時間長、割合については、表 6 で示す。

表 6：トルコのニュースにおけるポーズ

番組	秒	ポーズの回数	ポーズ時間長 (s)	ポーズの割合
Sabah	30	8	2.91	9.7%
Haber	28.6	4	1.30	4.5%
Haberler	30	5	2.23	7.4%

3 名分のデータをふまえて、1 分あたりのポーズの回数、時間長を回帰直線で予測したところ、回数は $0.1998x - 0.3508$ から 11.6 回、時間長は $0.0719x - 0.0364$ から 4.35 秒となった。したがって、予測される割合は 7.3% となった。

3.2.3. 単純な物理量としての補正值

こちらも日本語と同様にポーズを抜いた補正值を算出した結果、5.52 音節毎秒 (± 0.60)、331.08 音節毎分 (± 35.95) という結果になった。

3.3. 考察

3.3.1. 発話速度の対照分析

まず、発話速度を対照するためには、日本語を音節で数え直す必要が生じる。日本語の特徴をとらえるには、日本語母語話者にとって直感的な分節単位である拍（モーラ）を用いる方が分かりやすい。しかし、他言語と対照するには、多くの言語はモーラに分節する必要がない、あるいは理論的にモーラに分節できても実体がないため、同じ基準で対照できない。また、モーラの特性として、等時間性を有する分節単位であることが言われている（図 1）が、18 言語の音節と持続時間長の相関性を検証した福盛（2015）では、巨視的に見れば音節でも正比例の関係は成り立つことが示されている

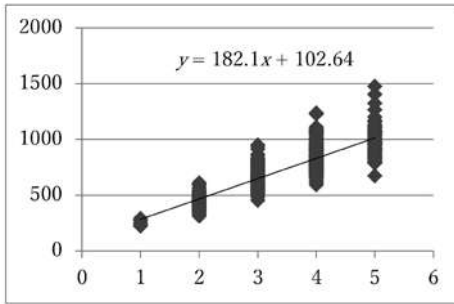


図1 日本語のモーラと持続時間長との相関性

（横軸：モーラ数、縦軸：持続時間長 ms）
（福盛 2015 改）

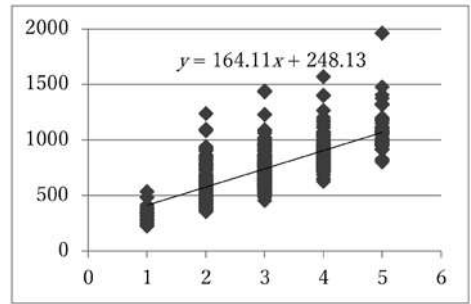


図2 日本語の音節と持続時間長との相関性

（横軸：音節数、縦軸：持続時間長 ms）
（福盛 2015）

（図2）²⁾。

これらの点をふまえて、対照分析をするにあたって全ての言語で同一の基準で行なう必要があるため、日本語を音節で数え直す準備が必要となる³⁾。本研究では、数える際の基準として、/CV/ に撥音、促音、長音が後続する場合、それらを含む構造、すなわち /CVN/, /CVQ/, /CVR/ を1音節として捉え、二重母音は定義があいまいな現状があるため扱っていない。また、日本語の音素配列論上、長音-撥音-促音と並ぶことができる /CVRNQ/（ただし、R, N, Q のどれか1つが欠けてもかまわない）も1音節と捉えた。以上の基準で、表2を音節で数え直した一覧として、表7を示すことにする。平均秒速は5.33音節毎秒（±0.75）、平均分速は319.63音節毎分（±45.25）であった。そして、ポーズを除いた単純な物理量としての発話速度を示す補正値は、6.97音節毎秒（±0.99）、平均分速は417.92音節毎分（±59.20）であった。

2) 福盛（2015）のデータをもとに、1音節と1モーラの時間長を基準にして、それぞれ1として正規化した場合、音節の傾きは0.54、モーラの傾きは0.73となる。傾きが、より1に近づくことが、モーラのゆるやかな等時間性を保証しているものと考えられる。

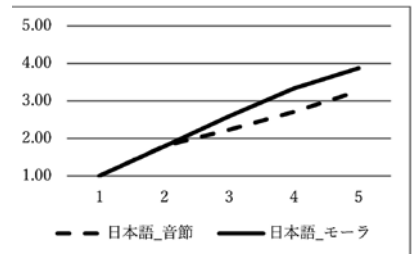


図3 日本語における音節とモーラでの傾きの違い

3) 音節カウントの補助作業として、池田彩子氏、河西和美氏、濱岡佑帆氏、友清悠里氏の協力を得た。この場を借りて感謝の意を申し上げる。

表 7：日本語でのニュースにおける発話速度（音節基準による算出結果）

放送局	発話者	秒	音節	秒速	分速
NHK1	瀧川剛史	66	293	4.44	266.36
NHK2	瀧川剛史	61	339	5.56	333.44
NHK3	和久田麻由子	40	174	4.35	261.00
NHK4	守屋瞭	66	367	5.56	333.64
NHK5	荒木さくら	61	335	5.49	329.51
NHK6	新井秀和	65	380	5.85	350.77
日テレ1	杉野真美	33	194	5.88	352.73
日テレ2	矢島学	29	154	5.31	318.62
日テレ3	藤井貴彦	62	400	6.45	387.10
日テレ4	森富美	69	343	4.97	298.26
日テレ5	藤田大介	60	326	5.43	326.00
TBS1	よしいよしこ	46	262	5.70	341.74
TBS2	山内あゆ	29	166	5.72	343.45
TBS3	井上貴博	19	117	6.16	369.47
TBS4	水野真裕美	61	345	5.66	339.34
TBS5	伊東楓	60	376	6.27	376.00
テレ朝1	高島彩	63	240	3.81	228.57
テレ朝2	高島彩	18	82	4.56	273.33
テレ朝3	徳永有美	25	131	5.24	314.40
テレ朝4	下村彩里	67	359	5.36	321.49
テレ朝5	本間智恵	48	253	5.27	316.25
テレ朝6	島本真衣	44	216	4.91	294.55
テレ東1	末武里佳子	54	311	5.76	345.56
テレ東2	狩野恵里	29	183	6.31	378.62
テレ東3	塩田真弓	26	165	6.35	380.77
テレ東4	塩田真弓	54	319	5.91	354.44
テレ東5	大江麻理子	40	200	5.00	300.00
フジ1	木村拓也	36	216	6.00	360.00
フジ2	加藤綾子	31	185	5.97	358.06
フジ3	加藤綾子	50	249	4.98	298.80
フジ4	加藤綾子	50	179	3.58	214.80
フジ5	佐々木洋子	50	255	5.10	306.00
フジ6	今湊敬樹	51	258	5.06	303.53
フジ7	三田友梨佳	50	172	3.44	206.40
フジ8	島田彩夏	57	289	5.07	304.21

日本語における表 7 とトルコ語における表 5 の結果をふまえて、1 分あたりの情報量を見てみると、日本語が 320 音節、トルコ語が 307 音節といったように、音節数で見ると限り大差ないと言える。しかし、ポーズを除いた物理量としての発話速度を見てみると、日本語が 418 音節毎分、トルコ語が 331 音節毎分となる。この違いは、ポーズの取り方に影響されていると考えられる。

3.3.2. ポーズの対照分析

ニュースにおいて、1 分あたりの情報量については、日本語でもトルコ語でも大差ない。しかし、ポーズの取り方には顕著な違いがある。日本語でのニュースはトルコ語でのニュースに比べて、1 分あたりでのポーズの回数が多く、総時間長が長いことは、表 8 から明らかである。それぞれの言語での平均的なポーズ時間に相当するニュースの冒頭 30 秒における発話とポーズを図示した一例を図 4 で示しておく。

表 8：ニュースにおけるポーズの対照

	回数（毎分）	総時間長（毎分）	1 分あたりの割合
日本語	31.6 回	15.67 秒	26.1%
トルコ語	11.6 回	4.35 秒	7.3%

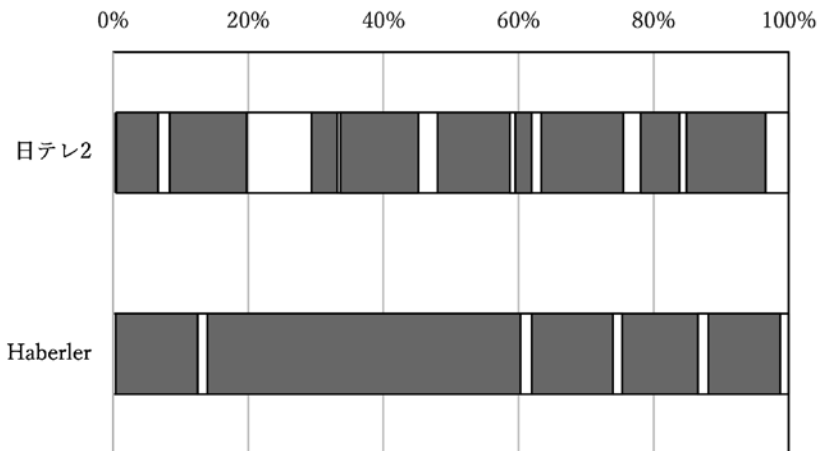


図 4：冒頭 30 秒での発話とポーズの一例

（塗りつぶしている部分が発話している部分、白の部分がポーズ）

この結果から言えることは、日本語はポーズを多く入れるため物理量としての発話速度は早くなり、トルコ語はポーズをあまり入れないため物理量としての発話速度は遅くなるということである。この違いが両言語における差異だと言うことができる。

ただし、物理量としての発話速度が早くても、利き手の情報処理の負担はポーズが多い方が軽減される。1分あたりの情報量は日本語のニュースの方が多くいけれども、頻繁にポーズがあることによって、聞き手の聴解を促進していると考えられる。発話速度に対してポーズの挿入がどの程度負担を軽減するかについては、別途実験や調査を重ねて、今後の課題としたい。

3.3.3. 他言語との対照分析

これまでに述べてきた基準に基づく計測値が提示されている分析結果があれば、他言語との対照分析も可能となる。

例えば、広実 (2000) においては、1999 年における日本語のニュース (NHK) と英語のニュース (BBC) の発話速度を扱っているが、両言語において音節でカウントされている。そして、ポーズを除いた連続音声内での持続時間長に対する発話速度が計測されている。結果として、日本語では 8.6 音節毎秒、英語では 4.9 音節毎秒という結果が示されている。ただし、連続音声全体の時間長と音節数で計算し直すと、日本語は 8.3 音節毎秒、英語は 5.2 音節毎秒となる。ここから 1 分あたりの情報量を算出すると、日本語では 499 音節毎分、英語では 314 音節毎分となる。現在のニュースと比べて、日本語のニュースにおいて 1 分あたりの情報量が多いという点については、最上 (1999)、福盛 (2008, 2010) の結果からも捕捉され、1999 年当時の情報量としては平均を大きく逸脱するものではない。そして、日英間における発話速度では、両者の間に有意差がある ($t(15)=7.5495, p<0.01$) ので、日本語の方が早いと言える。また、1999 年当時の英語のニュースの発話速度は、2020 年のトルコ語のニュースと大差ないことも確認できる。

ニュースにおけるポーズの日英対照として、広実 (1999) では、連続音声、文内ポーズ、文脈ポーズの平均値がそれぞれ示され、日本語の方が連続音声が短く、ポーズが多いことが指摘されている。ただし、全体の時間長に対する回数や割合が示されていないので、本研究結果との対照は行なえない。

山根 (2017) では、2010 年代のアメリカ英語のニュース (ABC) によるポーズの割合が示されており、平均 11.2% とされている。これは、日本語のニュースにおける 2006 年当時および 2020 年の両者と比べても、短いと推測できる。

4. 結語

日本語のニュースを日本人の直感に合うように分析するにはモーラで数える方が分かりやすい。しかし、他言語との対照をするためには音節で数え直さなければならない。この点をふまえたうえで、トルコ語のニュースとの対照分析を行なうことができた。

本研究で明らかになった点は、以下の通りである。

- ・日本語のニュースにおいて、2006年に比べて2020年では1分あたりの情報量が減っている。
- ・日本語のニュースの発話速度においては経年変化がある。1960～70年代は約400モータ毎分、1980～90年代は約500モータ毎分であったが、2006年は453モータ毎分といったように経年的に早口にはならないという結果が示され、2020年にいたっては382モータ毎分といったように、2006年よりさらに遅くなり、1960～70年代の発話速度に戻ったことが確認できた。
- ・日本語のニュースにおけるポーズの割合は、2006年に比べて2020年では長くなっていることが確認できた。
- ・日本語とのニュースとトルコ語のニュースでは、音節カウントでは1分あたりの情報量は変わらない。しかし、日本語のニュースの方が、ポーズの回数や割合が多い。その結果、物理量としての発話速度は、日本語が418音節毎分、トルコ語が331音節毎分といったように、日本語の方が速くなっている。

日本語のニュースの発話速度ならびにポーズにおける経年変化は、常に頭に入れておかなければならない。放送業界以外の人間にとっては経験則では分かりにくい事実であり、様々な発話速度と比べるにあたって、いつの時代のどういう基準に基づくものなのかの記録や結果が必要である。これに従い、またしばらく経ってから、経年変化があるのか、あるとしたらどのような要因なのかについて探っていかなければならないと考える次第である。

付記

本研究は、JSPS 科研費 JP20K00581 の助成を受けたものである。

参考文献

- 今井篤（2005）「高齢者用話速変換技術」『騒音制御』29-1：41-43.
- 広実義人（1999）「日・英語ニュースリーディングにおけるポーズに関する一考察」『目白大学短期大学部研究紀要』36：79-86.
- 広実義人（2000）「日・英語ニュースリーディングの発話速度の比較」『目白大学短期大学部研究紀要』37：227-230.
- 福盛貴弘（2008）「ニュース番組におけるアナウンサー・キャスターの発話速度」『大東文化大学外国語学部創立35周年記念論文集』191-209.
- 福盛貴弘（2010）『基礎からの日本語音声学』東京堂出版
- 福盛貴弘（2015）「音節数増加と時間長との相関性に関する通言語的調査」『語学教育研究所創設30周年記念フォーラム』175-194.
- 福盛貴弘（2017）「トルコ語音節構造一覽」『一般言語学論叢』20：57-175.

福盛貴弘(2020)「国語科教育における「音節」の的確な理解に向けて」『教職課程センター研究紀要』
5：133-140.

最上勝也(1999)「ニュース報道の読みの速さとその計測法」『言語』28-9：40-43.

山根繁(2017)「アメリカテレビニュース英語の音声特性」『外国語学部紀要』17：17-33.